

名所歌小考

——「元久詩歌合」臆断——

田 尻 嘉 信

「作歌便覧」的な歌枕所載の地名から、次第に名所の意識が明らかとなつて、名所歌の範疇ができあがるのは平安末期である。公任「諸国歌枕」・「能因歌枕」を先蹤に、名所歌枕が歌書に載り、名所の故実が説かれ、名所題による歌合があらわれる。日常見聞の単なる地名ではなく、歌が意識的な創作詩の性格を濃くする段階に、独自の表現機能・連想内容にかかわる歌語として、定着したのが名所である。当然、多くの地名から取捨淘汰され、ゆたかな匂いと響きとをもった人工洗練の歌語への関心が、もとなつてゐる。

「建保内裏名所百首」(建保三年)の成立によつて、名所題詠は規範化されたとみられる。のち、多くがこれにつき、百首形式とともに百名所題を襲ひ、秘伝化される傾向にも及ぶが、その前庭に注目されるのが「最勝四天王院名所障子和歌」(承元元年)である。その時代が、名所和歌の制作にもっとも有効な場と詩法とを供したことは疑いなく、この歌会は、名所題詠を専心に催された、きわめて意図的な最初の試みといえるものであつた。一三首という新古今最多の切入歌には、後鳥羽院の好尚もみえるが、この障子歌は、撰集のもととなつた美意識による、名所歌の水準を示した歌群であつたとみていい。

それに較べると、新古今直後の「元久詩歌合」(元久二年(一二〇五年)の場合)、格別、名所を主題にしての催ではない。名所歌の濃度は、当然、障子歌より劣ることになる。ただ、切入歌八首は次位の歌数であり、中に新古今の時代と世界を象徴する、院の水無瀬讃歌の含まれることが関心を喚ぶ^{註1}。新たな脚光のもとに、水無瀬による名所歌の創出は、さすがに当代の作歌の実質を明らかにするものであった。そのことから、詩歌合の隠れた一面として、名所歌の意識を探ってみたい。

二

「元久詩歌合」披露への経過は、「明月記」に詳しいが、元久二年四月二十九日条に次の記事がある。

参^三殿下、大僧正参^三給、頭弁伺^三候御前^一(中略)此次又可^レ被^レ合^三詩歌^一之由被^レ議定、出題歌人可^レ催之由蒙^レ仰退出、此事頗無益事也、以^三書状^一少々触送了、題、水郷春望・山路秋行、大僧正御房・宰相中将殿・有家朝臣・下官・保季朝臣・家隆朝臣・雅経・具親・讃岐・丹後、詩人、御作・大納言殿・中納言資・左大弁・長兼朝臣・為長朝臣・宗業朝臣・成信・孝範・信定

これによると、摂政良経の邸で、当主良経と慈円・長兼との間で詩歌合の企てが出て、出題と歌人の選考が定家に託された。定家は「此事頗無益事也」と消極的であったが、題は「水郷春望」・「山路秋行」の二題、歌人は慈円・良平・有家・定家・保季・家隆・雅経・具親・讃岐・丹後、詩人は良経・良輔・資実・親経・長兼・為長・宗業・成信・孝範・信定の双方一〇名ずつ、大体、以上の構想が定まった。のち、院が参加を望み、その旨を届けた家長も出詠が許され(同五月三日条)、五月十日に良経主催で院御所で披露のはずであったところ、詩が院御所で催された例がなく、この月を忘れて延引された(同五月二〇日条)。しかし、結番も良経によって決定され(同五月二二日条)、六月十三日「詩歌

合明後日云々」(同)と記載された。当日の「明月記」は「蟄居」と記すのみであるが、「慈鎮和尚 同(元久)六月一五日、於三辻殿詩歌御会、被_レ接_二其席_一」(記門)の記事があり、延引された根拠はない。

結果的には、企画当初に較べて出詠者の数は増え、詩人九名(在_高頼範・盛経・宗行・家、歌人は讃岐が不参であつたが(寛行・長・宗・親・他に未詳))が加わつた。二歌題は、各題二首、三八番で、都合七六番の詩歌合と院と家長を除いて八名(通光・蓮性・大納言局・行能(葉清・長明・秀能・俊成・女))が加わつた。二歌題は、各題二首、三八番で、都合七六番の詩歌合となつたわけである。各番ともに、左に詩(七言・対句)、右に歌を配したが、現存本には欠脱が多い。「山路秋行」二六番から三八番までの詩を欠き、「水郷春望」七番から一〇番、「山路秋行」二九番から三二番は、ともに詩の作者を失っている。また、七六番のうち、勝負の判を欠くものが二五番に及ぶことも、不審である。異議あつてか、あるいは、当初から故意に削除して書写したか、事情は明らかでない。^{註2}

このように、資料的にはかなり不体裁の難をまぬかれないが、この詩歌合が、当初発企の時点に較べて、性格を異にした公的な一面を帯びて来たことはたしかである。良経中心の小規模な詩歌合の先例(正治二、関二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)はあるが、院御所での最初の催となり、出詠者の増大という点で、同じく良経の企画とはいひながら、新古今撰進後の院歌壇の行事という性格をもつたものとみられる。さきの切入歌の問題もあり、そこにこの詩歌合の、撰集の意識と性格とを補填充足する一面があつたとみることができるのである。

三

さて、「水郷春望」の歌題で結番された歌三八首を、その題材によつて分けると、霞二首・春風六首・曙五首・春月四首(空月一・春月一を含む)・桜四首・芦三首・春夕二首・柳二首となつてゐる。伝統的な霞がさすがに多いが、中で、春風・春月・春夕の題材は、ことに新古今今のの評がある。また、春風・雪解・夕月夜などの風情にかよわせた芦の

歌も、この時代の歌風の新しさ、細やかさを示すものといわれる。^{註3}そして、次の三首が、新古今の切入歌である。

三島江や霜もまだひぬ芦の葉につのぐむほどの春風ぞ吹く（三番右^勝春上、通光）

夕月夜潮みち来らし難波江の芦の若葉を越ゆる白波（三四番右^{マア}無判^{マア}、同、秀能）

見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ（三七番右^{マア}無判^{マア}、同、後鳥羽院）

芦・春夕が題材とされている。通光の歌は、好忠の、「三島江につのぐみ渡る芦の根のひとつのほどに春めきにけり」^{（後拾遺）}^{（春上）}を本歌に、「霜もまだひぬ」「つものぐむほどの」の対照法で、冬から春への推移交錯を微妙にあらわしている。秀能は、早春の夕べ、ほのかな月光の下に、稚い芦の若葉の青さと、満ち来る潮の白さとによって、難波江の大らかな全景から、足もとの幽かな動きに焦点を求めて、精細に、一首のゆるぎない構成を示した。優艶なしかも、幽かな風情を尽くして、いかにも好ましい印象的な歌柄となっている。主上らしい、風格のゆたかな院の一首も、また、会心の作であったことは想像にかたくない。これら三首が、切入れの結果、新古今の排列美に寄与していることは、やはり認めなければなるまい。切継にみる院の鑑識のたしかさを知るのである。

ところで、右の三首は、三島江・難波江・水無瀬川と、名所が詠みこまれている。この詩歌合は、すでに述べたように、元来、名所詠を目的としていないが、「水郷春望」の歌はほとんどが名所の歌になっている。三八首のうち、三三首がそうである。それを名所ごとにあげれば、次の分布となる（^{（ハ）}内の数字は結番を示す）。

志賀一〇首（2 5 8 12 15 21 24 27 36 38）・宇治四首（1 13 20 28）・難波三首（6 29 34 35）・三島江二首（3 18）・水無瀬二首（16 37）・美豆二首（19 36）^{（以下各一首）}井手（4）・梅津（9）・高瀬（10）・桂川（14）・淀（17）・芦屋（22）・音羽川（23）・津の国（25）・石上布留（26）・須磨（33）

「水郷」の制約もあって、すべて水に縁のある地である。最多の志賀が群を抜くが、難波以下も、石上布留・宇

治・井手・須磨・芦屋など、歴史上の旧蹟であり、古来、多くの歌に詠まれている。平安遷都によって万葉大和がすたれたのでもなく、山城の歌枕が急増したのでもない。伝統の歌の世界の不思議さであるが、いま、これらの中でその主なものについて、歴代の撰集にみる歌数をあげれば次のようになる（新古今、は後掲）。

難波 二二九首

古8（恋2 雑5） 撰12（恋8） 拾11（物名2 雑4） 後拾9（春3 冬1 別1） 金3（秋2） 詞3（夏2） 千9（春1 冬2 旅1） 新勅9（賀1 夏1 冬1） 続撰12（夏1 秋2 冬1） 続古10（旅1 恋3 雑1） 続拾7（春1 夏1 秋1） 新撰8（春2 夏2 恋1） 玉18（春2 夏1 秋2 冬2） 続千20（春2 夏1 秋2 冬3） 続後拾20（春2 夏3 秋2） 風9（夏1 秋1） 新千20（春1 秋2 冬4 旅1） 新拾16（秋4 冬2 別2） 新後拾13（春3 夏3 冬4） 新続古13（春6 秋2 冬1）

志賀 九三首

拾2（哀2） 後拾3（恋2） 詞1（春1） 千12（春5 夏1 秋2 冬1 雑3 神1） 新勅4（秋1 冬2） 続撰5（春3） 続拾7（春3 冬2） 新撰3（春1 秋1 山越） 玉5（春2 雑2） 続千5（春3 秋1） 続後拾3（春2） 風1（春1） 新千12（春7 冬1） 新拾9（春6 冬1） 新後拾8（春2 秋2 冬1） 新続古11（春4 秋3）

須磨 九一首

古2（恋1） 撰2（恋2） 拾2（雑2） 後拾3（旅1 恋1） 金1（恋1） 詞2（夏1） 千9（夏1 秋1 冬1） 新勅5（秋2 冬1） 続撰8（春1 恋5） 続古8（秋3 旅1） 続拾2（秋1） 新撰9（秋2 冬4） 玉9（秋3 冬3） 続千7（秋1 冬1 旅1） 続後拾1（別1） 風1（雑1） 新千6（秋2 旅2） 新拾5（秋1 旅1 恋1） 新後拾5（秋2 冬1） 新続古4（秋1 冬1）

石上布留（布留） 七一首

名所歌小考

古 4 (夏¹恋¹) 撰 4 (春²秋¹) 拾 3 (恋²神¹樂¹) 後拾 1 (秋¹) 詞 1 (春¹) 千 3 (夏¹恋¹難¹) 新勅 2 (冬¹秋¹) 統撰 8 (春¹夏¹難¹)
 夏¹ 統古 5 (春¹冬²神¹難¹) 統拾 5 (春²夏¹難¹) 新撰 3 (春³) 玉 3 (秋²難¹) 統千 8 (春¹夏¹冬¹恋⁴難¹) 統後拾 3 (春¹夏¹難¹) 風 6 (春³夏¹難³) 新千 5 (秋¹冬¹難³) 新拾 2 (夏¹春¹難¹) 新後拾 1 (難¹) 新統古 4 (秋¹難²恋¹)

宇治 六五首

古 4 (恋²難²) 撰 3 (秋¹難¹旅¹) 拾 1 (恋¹) 後拾 1 (冬¹) 金 2 (秋¹難¹) 千 2 (冬¹恋¹) 新勅 1 (春¹) 統古 3 (春¹秋¹難¹)
 統拾 5 (秋²冬³難²) 玉 7 (秋⁵難²) 統千 4 (秋¹冬¹難¹積¹) 統後拾 4 (春¹秋²難¹) 風 4 (春¹秋³難¹) 新千 4 (冬³秋¹難¹) 新拾 6 (春³夏¹難¹恋¹) 新後拾 8 (春¹夏¹秋²冬²難²) 新統古 6 (春¹夏¹秋²難²)

井手 四七首

古 1 (春¹) 撰 1 (恋¹) 拾 1 (春¹) 後拾 3 (春³) 金 1 (春¹) 千 4 (春⁴) 新勅 1 (春¹) 統撰 1 (春¹)
 統古 1 (恋¹) 統拾 4 (春³冬¹) 新撰 3 (春³) 玉 2 (春²恋²) 統千 2 (春²) 統後拾 5 (春³物¹名¹恋¹) 風 4 (春³難¹) 新千 3 (春²夏¹難¹恋²) 新拾 5 (春⁴難¹) 新後拾 3 (春²難¹) 新統古 2 (春¹夏¹難¹)

三島江 一四首

拾 2 (恋¹難¹) 後拾 1 (春¹) 新勅 3 (恋²難²) 統撰 1 (恋¹) 統千 1 (難¹) 統後拾 1 (冬¹) 新千 1 (恋¹) 新拾 1 (恋¹) 新後拾 1 (秋¹) 新統古 2 (秋¹難¹)

次に、これらの各項を新古今に求めてみたい。部立とに大観番号で示すと、以下のようになる(右脇の●印は当代歌入、○印は当代歌入を示す)。

難波 一三首

春 26 ◎ 57 秋 400 冬 625 ● 626 哀 823 旅 973 ● 恋 1049 1063 1077 ● 雑 1553 1591 1595

志賀 六首

春 16 ● 174 ● 冬 639 ● 656 雑 1505 ●

須磨 一〇首

恋 1041 1065 ● 1083 ● 1117 ● 1210 1433 1555 ● 離 1596 1597 1598 ●

石上布留 九首

春 88 ● 96 ● 171 ● 夏 581 ● 冬 660 698 ● 恋 993 1028 ● 雑 1795

宇治 一一首

春 169 ● 夏 251 ● 秋 420 ● 494 冬 611 ● 636 ◎ 677 ◎ 賀 742 ● 743 雑 1646 1648

井手 四首

春 159 ● 162 恋 1089 ● 1367

三島江 二首

春 25 ◎ 夏 228

歴代の撰集をみれば、さすがに伝統的な、いわゆる歌名所が多くうけつがれていることがわかる。これらの題材・発想などの制約は、当初の歌枕の時代に大体かたちづくられ、多くはそれに拠っている。しかし、個々にい

ば、難波で材とされるのは芦(根・若葉・結葉・小舟)・漂標であるが、のちになるほど恋の発想は少くなっていく傾向が、さきの表示から明らかである。志賀についても、当初の近江古京への哀傷は薄らいで来る。神祇歌は、日吉社も近く、唐崎の祓の反映でもあるが、中心は、次第に四季歌の方へ移っている。霞・花・月・時雨・冬浪などが主材となる。

また、須磨は、蟹(塩・塩)・藻塩・関屋・浦風を材とするが、恋の発想とともに、四季、ことに秋夕を中心とする歌が増え、一方では、関屋をめぐる行旅の詠嘆が多くなつて来る。源氏物語の光源氏流涕が、詩情の背景となつて来る向きが濃い。その点では、石上布留・井手の場合は、めだつ変化がないようである。前者では神杉・高橋・中路・早稲田が古く、新古今で桜が加わり、懸詞「ふりにし」の恋の発想もある。後者は山吹・かはづが中心で、大和物語(第一六)の「井手の下帯」の後流がわずかにみえるが、伊勢物語(第二二)・源氏物語(真本)の痕跡はほとんどない。新古今の場合も右の推移の一環にあたるもので、全く別の系譜に属していたわけではない。しかし、たとえば、

難波瀉潮満ち来らし雨衣田蓑の島にたづなきわたる(古今・雑上・読人しらず)

さ夜ふくるままに汀やこほるらむ遠ざかりゆく志賀の浦浪(後拾遺・冬・快覚)

風をいたみくゆる煙の立ちいでてなほこりずまの浦ぞ恋しき(後撰・冬・恋四・貫之)

春深み井手の川浪立ちかへりみてこそ行かめ山吹の花(拾遺・春・源順)

これらの歌に較べて、

夕月夜潮満ち来らし難波江の芦の若葉に越ゆる白浪(新古今・春上・秀能)

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間よりこほりて出づる有明の月(冬・同・家隆)

須磨の蟹の袖に吹きこす潮風の間とはすれど手にもたまらず(同・恋二・定家)

駒とめてなほ水飼はむ山吹の花の露添ふ井手の玉川（同・俊成）

のような歌をみれば、同じく名所を扱うにしても、両者のへだたりは歴然としている。大勢には従いつつも、それを歌の上にきわめて自覺的にとりあげる作歌意識の深化と巧緻な詩法とが、相乗的にはたらくことによって、みごとな結実をもたらしているのである。

四

したがって、新古今初見の名所というものは、顕昭の故実談義（袖中抄）があつた、「瀬見の小川」など、ごくわずかである。全体では、後述の吉野二三首（中、当代）が筆頭で、以下、難波・立田一三首（中、当代）、宇治・須磨の順となつてゐる。中でもっとも新古今的なものとしては、宇治をあげることができる。「花月百首」の定家の幻想的な、

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫（秋上）

の一首に代表され、のち、古今以来、絶えてなかつたこの橋姫が、宇治の歌の半ばを占めることになる。「最勝四天王院名所障子和歌」からも、院と慈円の歌が切入れられてゐる。^{註4}

また、寂蓮的印象的な一首、

暮れてゆく春のみなとは知らねども霞に落つる宇治の柴舟（春下）

も忘れたい。源氏物語の宇治十帖（浮舟）に描かれた素材・柴舟をはじめて生かしたもので、そのすぐれた着想が評価される歌である。いずれも、宇治への当代の好向をつぶさに示したもののといつていい。

次に三島江の場合をあげたい。これは人麿・好忠・公実の例はあるが、新古今の先達となる経信（新古今 228）・俊頼

（新勅撰 1192）基俊（続後撰 811）に詠まれたことが有力な示唆となつていようか。それが、良経（六百番歌合 見窓）・寂蓮（建仁元年八月影供歌）

合初恋
三番右負）・顕昭（千五百番歌合、一一八五）などに及び、通光自身も千五百番歌合に、

人知れぬ心の同じ友なれやはのみしまえの芦の乱れは（一一四四）
（一番右負）

の一首を詠んでいる。いかにも時代の雰囲氣に促されて、この一時期だけに光彩をみせた趣が深い。この詩歌合の歌が切入られた理由もわかるようである。のちは経平女（統千七三）・為道（統後449）だけである。

ほかには、芦屋・梅津・桂川・高瀬・美豆が出色である。まず芦屋は、伊勢物語（第七段）に、次の一首がある。

芦の屋の灘の塩焼いとまなみ黄揚の小櫛もささず来にけり（古今六帖・新古今）
（第五・櫛）・維中

この「芦の屋」は万葉より範圍が狭く、「芦の屋の灘」で、摂津国菟原郡内の地、現在の灘・芦屋をさすと解される。「芦の屋のこや」も同義か、「津の国へまかる道にて」の詞書で能因の歌（後拾遺507）がある。しかし、兼盛集に、「芦の屋のこやともいはば津の国の難波のことかいはずあるべき」と懸詞ながら一例があつて、「芦屋」とは区別されているようにみえる。やがて「津の国のこや」とも出て来る（六百番歌合）「芦の屋」は普通の詞となり、芦の縁で、難波の材とされ、かわつて地名には「芦屋」があらわれる。この時代には、

芦の屋の芦の籬も霜がれて難波の浦も冬ぞ寂しき（家隆・詠二百首・冬）
（家隆・老若五十首歌合、二四九）
（家隆・番左持・建仁元年二月）

いつもかく寂しきものか津の国の芦屋の里の秋の夕暮（家隆・老若五十首歌合、二四九）
（家隆・番左持・建仁元年二月）
（詠百首和歌・冬）
（詠百首和歌・冬）
（御妻瀬百首・秋）
（御妻瀬百首・秋）
（建久元年二月）
（秀歌）

のように明らかに区別されている。「芦屋」は、ほかに慈円四首（詠百首和歌・冬）
（詠百首和歌・冬）
（御妻瀬百首・秋）
（建久元年二月）
（秀歌）

「能因歌枕」・「和歌初学抄」には、「芦屋」・

「芦の屋」ともなく、「芦屋」だけが「八雲御抄」（第五、名所部）の「里」に載っている。したがって、詞としての「芦屋」は新古今の時代に定着したとみていい。芦屋の歌は新勅撰以後にあらわれ、俊成（新勅撰520）・家隆（統古361・老若五十）・秀

能(同下1736)・家良(夏拾182)・定家(同上278)の当代、その後流の順徳院(新後撰600)・為家(統古1036)・後深草院少将内侍(統後撰337)・実重(新後撰1218)・国冬(統後拾335)・後龜山院(新統古104)・雅世(同下535)にかざられるのである。

貫之の「大井川行幸和歌序」に載る梅津(京都市右京区)は、順・好忠(長歌二)・和泉式部・惠慶の家集に散見され、読人に人々まかりて、田家秋風といへる事をよめる」の詞書をもつ、経信の「夕されば門田の稲葉おとづれて苜のまろやに秋風ぞ吹く」(金葉・秋小倉百人一首)という、清爽な一首に負うものといっている。

その経信は桂大納言を号したが、古今六帖(第三里)に載る伊勢の館が「桂の宮」と呼ばれ、源氏物語(松風秋)に「桂殿」が描かれている。都の西郊の清閑な山莊地として迎えられたのが桂の里であった。そこを流れる桂川は、大井川の下流にあたる。古今六帖(第三里)に鵜飼の篝火が詠まれ、元輔集・実方集に一首ずつ載るが、大井川に較べると歌数は問題にならない。あとも実雄(新千載498)が載るだけである。この時代、定家の、

ひさかたの中なる川の鵜飼舟いかに契りて闇を待つらむ(千五百番歌合・四六〇番右勝
八新古今・夏二五四)

という知巧の一首がある。本歌取(本歌、伊勢八古今
下九六八)によるものながら、「ひさかたの中なる川」として月の桂と下旬の闇との対照表現に、修辞の技巧を忍ばせるものがある。

高瀬は、神楽歌に、「薦枕 いや 高瀬の淀に」(小前張
薦)とあり、枕草子に、「菰積みたる舟のありくこそいみじうをかしかりしか」(第二四段)と書かれている。和名抄の河内国茨田郡高瀬郷(大阪府守口市)で、そのあたりの淀の河流が、「高瀬の淀」である。古今六帖(第六)に一首載るほかは埋れて、六百番歌合になって、顕昭の次の歌があらわれる。

菰枕高瀬の淀にたつ鳴の羽音もそそやはれかくらむ(秋・一九番鳴、左負)

のちの撰集にも多くはなく、教雅(夏統後撰 210)・殷富門院大輔(同 690)・家長(同 691)・勝命(同 1017)・国冬(新拾遺 1574)・雅永(新統古 1357)の、当代以後の詠にかざられている。

美豆(京都府伏見区)は、巨椋池の西南にあたり、古くは木津・宇治両河の合流にいたる三角洲地帯を占め、古今六帖(第一 駒ひき)に載る禁裏の牧である「美豆の御牧」が知られた。のちに謡曲「芹刈」の舞台ともなる水郷で、真孤が主材となる。古今六帖(第六 孤)にはみえないが、読人不知歌(後撰 995)、相模(後拾遺 206)の例がある、しかし、この地も新古今の時代になって顕れたといっている。清輔(千載 184)・頼政(同 885)にはじまり、のちの撰集に「御牧」の家隆(新後拾 252)「菰」の西行(新千載 215)・雅経(新統古 21)「山吹」に師頼(統後拾 144)・後鳥羽院(同 145)がある。先人の師頼のほかはすべて当代の歌人だけとなっている。その中で、雅経の歌は、この詩歌合で詠まれた、霞むより緑も深し真孤生ふるみつの御牧の春の河風

という、春霞に煙る景趣を捉えて印象的な一首であった。

これらの名所は、「和歌初学抄」の牧(美豆)、川(梅津・桂)に載り、「八雲御抄」では野・牧(美豆)、里・川(梅津・桂)に載っている。ただ、高瀬だけは両書ともに載っていない。大方の承認を得るまでにいたっていないかったことになろうか。難波・志賀などの、伝統化された名所についてはいうまでもない。

和歌史に一期を画したこの時代は、わずかではあっても、未知の名所を発掘するとともに、周知のものについても清新秀拔な新領域を歌の世界にもたらしたいえる。「元久詩歌合」の名所歌は、そのあらわれとみられるものである。

「水郷春望」の歌題で詠まれた名所は、大体、右のように、多くは伝統につちかわれた重厚な歴史的感覚のものであったが、力量ある歌人の詩法によっておのずから求められた、新味のあるものが併在している。それだけ、この詩歌合が意欲的な試みであったことが想像されるが、出詠の歌にもすぐれたものが少くない。以下、いくつかの名所についてあげてみたい。

志賀一〇首には、次の歌がみられる。

志賀の浦の浪より霞むあけぼのに山吹きおろす春の松風（五番 右負・慈円）

志賀の浦に比良の山風吹きぬらむ花と散りかふ春のさざなみ（八番 右負・有家）

しずかな春光のうちに広がる志賀の淡海に、霞と浪と風を、あるいは、霞にかえて花を配して、情趣細やかな一幅の絵を構成するような客観詠となっている。「浪より霞むあけぼの」・「花と散りかふさざなみ」が印象もあざやかで、いかにも優艶な感覚の冴えをしるばせる表現である。ともに体言止となっていることが、余情を深いものになっている。

叙景の場合にも、それが単なる叙景に終らず、対象なり題材なりを充分手もとにひきよせて、心のもっとも深い部分で対応しようとする。そして、感傷夢幻の情感を内にたたえながら、それを客観的・構成的に、しかも、巧麗な修辞の技巧に基づく詞の駆使によって、寸分の隙さえもみせないのが新古今歌風の特徴であった。この二首は、やはり、その系列に属する作風を明らかに示したものである。

にほの海の霞吹きゆく春風に浪もいくよの志賀の花園（二番 右負・家隆）

みや木もるなぎさの霞たなびきて昔も遠き志賀の花園（一二番 右負・定家）

この二首の場合にも、右のことはいえるが、前のに較べると下句に主観の色が加わっているようにみえる。この

詞を接点として、幾重にも広がる淡海の幻想はまことに多彩である。

志賀の浦のさざなみ白くなりゆくは長良の花に風や吹くらむ (一五番 右持・大納言局)

志賀の浦や打ち出でし浪の花の上になほいろそふる春の山風 (二二番 右持・丹後)

春はこれいく霞ともしら浪の跡もつきぬる志賀の夕暮 (二四番 右△無判▽・行能)

志賀の浦の朧月夜の名残とて曇りもはてぬあけぼの空 (三八番 右△無判▽・院)

などの歌では、大納言局は作意がめにたち、丹後は上句がいずれも字あまりとなつて流麗感を欠き、行能は懸詞の理知に傾いているが、院の歌も、さすがに朧月夜から曙へかけてと着想にすぐれ、あわあわとした春の実感を巧みに捉えながら、「名残とて」の腰の句に、やはり理知の句いが漂うようである。

宇治は、橋姫(家隆・義・素清)と河浪(家良)があり、双方一首ずつ、まず家隆からあげたい。新続古今(春上22)に入る歌である。

橋姫の朝けの袖やまがふらむ霞も白き宇治の河浪 (一番 右負)

橋姫ながら、他の二首と同様、物語的な興趣を意図した歌ではない。この地らしい幻想を織りこんだ叙景で、袖から「霞も白き」と秀句的に表現したところが眼目である。

隔てつるまきのを山もたえだえに霞ながるる宇治の河浪 (二三番 右勝)

定頼の「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれ渡る瀬々の網代木」(千載)を本歌に、家長は、山と河とに景を広げ、霧を霞にかえて新味を出している。横尾山も初見の歌枕である。しかし、橋姫の神秘と夢幻に取材した家隆方が優艶の味わいも濃く、時代の好尚を示したものであるといふことができる。の難波は、秀能のほか、慈円と俊成女である。

難波江の芦の枯葉の春風に秋みし露の袖にこぼるる（六番 右ハ無判、慈円）

昔まではれをみする津の国の難波の沖の春のあけぼの（三五番 右持・俊成女）

慈円の歌は、秋冬春と季節の推移を詠み入れて巧みな反面、体言を揃えすぎて、たたみかけるような韻律となつた。それが下句の、その時の流れに立ちどまって、思いをひそめる風情に多少違和感を招いている。俊成女は、助詞「の」の多用が緩かな上句の気分と和して、縹緲と漂う夢幻の情調となり、懐古の情もとけこんで、深くゆたかに美しい詠嘆となっている。きわめて艶麗な一首である。

次に、新名所を二、三あげてみよう。

かつらのや河ぞひ柳浪かけて梅津ははやく春めきにけり（九番 右負・蓮性）

いづくとも霞ながれてみえぬかな高瀬の淀のあけぼの空（一〇番 右負・同）

ひさかたの中なる河は名のみして春は霞におぼろなる空（一四番 右持・家長）

雲雀たつ美豆の上野にながむれば霞流るる淀の河浪（三〇番 右持・長明）

のちに御子左家に叛く蓮性も、さすがに若く、二首とも、素直に春の美感をうたっている。高瀬の歌が、韻律・景趣ともに、春の茫漠とした気分をあらわしてすぐれている。家長は、定家の詞の「ひさかたの中なる川」を襲っているが、三句「名のみして」の理知の作意が目につようである。それに較べると、長明は、雲雀と霞とのとりあわせで、淀の流れをうたっているが、巧を弄せず、実感的に詠み下した趣がいい。これらとはちがって、名所を詠まない歌の中では、次の良平の歌がすぐれている。

春の夜のあけのそほ舟ほのぼのと幾山本をかすみ来ぬらむ（三三番 右持）

万葉の黒人の歌（卷一、五七
卷三、二七〇ハ重出）を彷彿するように、縹緲とした漂泊の思いをいだかせて、作者の温かい細やか

な、心の配りを示した一首である。続古今（春上48）にとられている。「水郷春望」では、さきにあげた新古今三首、新続古今二首と合わせて、都合六首が撰集に入ったことになる。

ところで、これらの歌には、作者の個性・力量による相異はあるが、色彩感を基調に、風・浪・霞・花など、多くの材を盛り、動きを添えて、優雅な春の気分情調を訴えていることが、共通している。それが、新古今の歌人たちの、刻苦と憧憬とによつてもたらされた作歌の規準であり、その意味で、この詩歌合は、よく時代の風をあらわしたものとなっている。「水郷春望」の歌が、多く名所歌となっているのも、叙景の効果をあげるにふさわしいゆき方がとられたことにほかならない。

それにしても、三八首のうち三三首とは、きわめて多い数である。すでに名所題の歌合があり、六百番歌合には「志賀山越」「広沢眺望」が春秋の歌題となっているが、それを含めて一八〇首（春二八・夏一八・秋二三）の名所歌がある。この傾向を追ってみると、次のようになる（千五百番歌合では内訳）。

御室撰歌合 一九首（二二〇）・老若五十首歌合 一二八首（五〇〇）・新宮撰歌合 二〇首（七二）・影供歌合（建仁元・八・三） 三三首（一八〇）・影供歌合（同二・五） 八首（七八）・水無瀬釣殿当座六首歌合 五首（二二）・水無瀬殿恋十五首歌合 二六首（二五〇）・千五百番歌合 六六九首（春二四八・夏六〇・秋一二〇・冬二五・祝四九・恋八七・雑九〇）・八幡若宮撰歌合一三首（三〇）

これで見ると、大勢は、一〇〜二五％の割合で、名所歌を含んでいることになる。したがって、「水郷春望」はきわめて特異な例である。ただ、この詩歌合でも、「山路秋行」の場合は、かなり事情がちがつている。紙幅もないので詳しくは別にするが、名所は、新古今の発掘といえる宇津山三首をはじめ、立田四首・吉野三首註5・かづらき一首・因幡峯一首、それに志賀山越一首が加わって、都合一三首となっている。右の表示に近い比率である。

「水郷春望」に名所歌の多い事情は明らかでないが、後鳥羽院の水無瀬殿と関係があると思われる。伝統的な難波・志賀などは別として、えらばれた名所の多くは、都に近く、日常の見聞の範囲内にあるといつていい。「山路秋行」に較べれば明らかである。勿論、名所歌は、経験的であるよりは、はるかに觀念的所産といふべきであるが、新古今の撰集を経て、歌人の心に占めた水郷「水無瀬」の面影は、深く大きなものであったにちがいない。桂川・淀川などその地への道筋の周辺に、水郷のいくつかが求められるのは自然である。「水郷春望」の名所の一面といえようか。その点で、やはりこの詩歌合は、新古今の撰進と切りはなして考えることができないのである。

註1 拙稿「新古今歌註『水無瀬の春』」（『跡見学園国語科紀要』一七集）

2 峯岸義秋氏「歌合の特殊様式」（『歌合の研究』所収）

3 有吉 保氏「元久詩歌合の一考察——特に新古和歌集撰修との関連について——」（『新古今和歌集の研究』所収）

4 拙稿「新古今歌解『宇治の橋姫』」（『文芸論叢』八立正女短大V3）

5 拙稿「『宇津の山』考」（『跡見学園国語科紀要』一九集）